

序章

海洋島嶼国家論への視座

はじめに——海と人の交わり

人々の眼が海から遠ざかりつつある。こう言えば、マリーナ・スポーツに興ずる人々やウォーター・フロントで生活する人達から反論が湧いてこよう。確かに彼らは海に面して、または海中で海上で海と交わりを続けている。だが彼らの言う海とは陸に接した沿岸の狭い海域を指すにすぎない。

正しく定式化しなおそう。人々の眼が大洋から遠ざかりつつあると。それは第二次大戦後、ジェット・エンジンによる航空機技術の飛躍的発達によってひきおこされた。それによって遠距離の人の移動は専ら空を経由して行われるようになった。太平洋上を東京からロサンジェルスまで移動する人々にとって太平洋は一種の空白、目的地までの数時間の拘束をつくり出す空白にすぎなくなった。彼らには旅客船時代の船客達の持っていた、海に、大洋に乗り出すという感覚は失われてしまった。こうして、一握りの有閑なる豪華客船の船客を除いては、大洋を実際に経験する人々は遠洋漁業の船員か遠距離海上輸送に携わる人々といった人達に限られるようになった。しかも、遠距離海上輸送におけるコスト引き下げ競争は乗組員から、高給を支払わねばならない日本人船員を駆逐してしまった。日本船籍の輸送船は減少し、日本船籍の船にも船長や少数の船員を除いては外国人船員で占められることとなった。こうして、大洋を直接経験する日本人は確実に減少しつつある。

一方、今日は「アジア・太平洋の時代」であるといわれる。確かに日本に

引き続きNIES、及びASEANそして中国沿海部の産業上の勃興は、大西洋の兩岸に住む人々の目を太平洋の方向へと引きつけた。そして、太平洋上の海上輸送量は確実に増大している。原材料や生産物の大動脈としての太平洋は、今後更に地位を上げこそすれ低下する兆しはない。いかに航空機が発達しようと石油のような燃料、鉄鉱石のような原材料、自動車のような大型生産物が航空機によって大量輸送されることはない。我々は物質生活の維持・向上を大きく大洋、ことに太平洋に依存しているのである。

その意味で太平洋は勃興しているといえる。「アジア・太平洋の時代」という呼称もその点においては正鵠を射ているわけである。

ここに認識と存在のギャップが生まれてくる。我々の意識から大洋が遠ざかるのに反比例するように我々の生活は大洋に依存を深めていく。

本書はこのギャップをいささかなりとも埋めようとする試みである。

とりわけ、我が国が洋上に浮かぶ海洋島嶼国家であるという自己認識から、海洋島嶼国家にとって、海とはいったいいかなる存在なのであろう、というのが我々の素朴な問題意識である。海のクラウゼヴィッツとも言うべきアメリカの海洋戦略家、アルフレッド・セイヤー・マハンによれば、「国々は、長い海岸線や海洋資源のおかげによってのみ海洋大国となるのではない。生活のために海に向かうのではない人々も含めて、市民が寄せる関心の強さによってシーパワーはその国の力となりうるのだ」という(カイパース [1993], p. 173)。我々日本人は、単に漁獲という意味にとどまらず海の恩恵を深く享受している。しかし残念ながら、我々はその恩恵について十分に認識しているとは言い難い。アメリカ合衆国では海上生活そのものを楽しむクルーズ船の旅客が1992年には400万人をこえ、世紀の終わりには1000万人に達する見込みであり、船でのクルーズは「アメリカの旅行産業の最も急速に成長している分野である」(同上, p. 171) という。この事実一つをとっても、逆に日本人の海洋そのものへの関心の低さは明瞭にあぶり出されてくる。その結果、日本人の世界認識に大きな欠落が生ずるのを我々は恐れる。

海の恩恵があまりにも自明のものとなった結果、我々は海についての総合

的思索をめぐらすことを閑却しているのではないかと思うのだ。

たとえば、フランスから日本へ向けてプルトニウム運搬船が向かった時、太平洋の島々は抗議の声を上げた。それは新聞の片隅で報ぜられて、事が終わると忘却の内に沈んでいった。それは運搬船が通ったのは公海上であったからだ。仮に、南米やカリブ海の国々が第二次大戦後に主張したように、領海が200マイルとなったならば、南太平洋は極小国家である島々の領海で埋め尽くされ、プルトニウムを運搬することはできなかったであろう。「公海」という制度ゆえに、プルトニウムという危険物質の航行も可能となったわけだ。

このことを是とするか非とするかはさておき、公海という制度が世界中に通用しているお蔭で、危険物質も含むあらゆる製品の自由な航行が保証されていて、その上に我々の生活が成り立っていることは認めずばなるまい。そして、公海という制度は自然発生的に現れ、無為自然の内に存続しているものではなく、人為的に創られ、現在もきわめて人為的に維持されていることも忘れてはならない。

また、一部海域を除いては、現在、船の航行が安全におこなわれているのも、海の数千年に及ぶ歴史の中ではごく最近の事象に属することも銘記さるべきであろう。海の歴史の大半は海賊船・私掠船の横行する無秩序で危険に満ちたものであった。

現在のように海が自由で平和な領域であるのは、実は我々の目に見えない所で行われている専門家達の努力の賜なのである。

海は一箇の天然であると同時に、我々にとっては表象と観念、意志と行為の場でもあるのであり、制度の束でもあるのである。

それゆえ、海は時代に応じて人間にとっての姿を変える。

それは陸と陸とを遮断する絶縁体ともなれば、陸と陸とを媒介する通路ともなりうる。

現在の太平洋の多くの島々の主人公達であるオーストロネシア系諸民族がアウトリガー(腕付き浮き)・カヌーを発明して太平洋に乗り出した約1万年前から、マゼランが太平洋を横断するまでの間、太平洋はその中に浮かぶ

島々をユーラシア大陸から絶縁する壁であった。そして、太平洋の全容がほぼ解明されるのは18世紀末、キャプテン・クックをまたなければならなかった。

つまり、太平洋の島々は、ユーラシア大陸で展開された4大文明に始まる文明史から数千年にわたって隔絶され続けてきたのである。

その間、太平洋の島々は独特の社会体制を創り上げていった。もちろん、島々の間にも変異は大きく、原初的な国家とも呼びうる政治体系を創り上げたトンガのような島から、人口数十人～数百人の村が自律単位を成して割拠するニューギニアやソロモン諸島まで、様々なバラエティーに満ちていた。

それが、キャプテン・クック以降始まる近代西洋文明の本格的進出で、島々は一様に国家形成へ向けて動き出す。それは、圧倒的な近代文明に対峙するために、島々が我が身によるわせるべく分泌した政治的外被であった。それによって、島々は大きく崩された海と陸のバランスを平衡状態に戻そうとしたのである。そうした試みの中から、共通のパターンが現れてくる。それが、我々が海洋島嶼国家の原像と呼ぼうとしているものである。その内実は各論における展開に譲るとして、本書を通じて貫いて流れるライト・モチーフは、水平線・異界・交易といった概念である。

海岸線にたたずんで水平線を見る者はその彼方に何があるのか想いを及ぼさずにはいられない。故司馬遼太郎氏は少年時代、内陸の村の、海を見たことのない子供達に海を説明しようとして、「とにかく向こうが見えない」と言ったらホラ吹き扱いされたと話している(司馬 [1996], p. 88)が、水平線は人間の視線をさえぎって、彼方を遮断するのである。そこから、様々な想念が生まれてくる。民俗学で海上他界と呼ばれるものもその一つであり、水平線の彼方にこの世と異なる異界を想定するのである。この異界の有様は多種多様で、松島論文にも触れられている琉球のニライカナイ、また中世日本の浦陀落、更には近世になると井原西鶴の女護島など様々なヴァリエーションを含んで現れる。ただそれら海上異界に共通して見られる特質は、それへのあくがれと同時に畏れをもふくむアンビヴァレントな感情だと言えよう。そ

の感情は異界からのマレビトがこの世に訪ねて来る時、緊張の極に達する。折口信夫によれば、ニライカナイから訪ねて来るマレビトはこの世に翌年の豊饒をもたらしに来訪し、この世の者達はマレビトを丁重に迎え饗応せねばならなかったと言う。さもなければマレビトは破壊の相を現じて、この世を荒廃に帰せしめかねぬ力をも帯びていたからである。

こうした海上他界から来訪してくるマレビトという観念は、これまた様々なヴァリエーションをとりながら、南太平洋の島々にも見られる。そうした海上他界から来訪してきたマレビトが島に住み着き、島人を従えて自ら王となるという観念が太平洋の島々に遍在していることを指摘したのがマーシャル・サーリンズであった。本研究会の一半はサーリンズのこの異人王モデルに触発されて進められたと言ってもよいもので、それはとりわけ橋本・大谷両氏の論文のライト・モチーフとなっている。両論文には、太平洋の島嶼諸国がアイデンティティを形成する際、異人王観念が挺子となって作用していくということが詳細に論じられている。そしてもう一つ、我々の研究会を推進する原動力となったのが海上交易論である。

やはり水平線の彼方において当地では産出しない異国の産物はその珍奇と希少ゆえに、あくがれを以て求められた。塩田が第1章で述べたように、ヨーロッパ人の大航海時代に火を点けたのは、はるか地球の裏側で産出されるクローブ・ナツメグなどの香辛料であった。それを通じて、西洋は近代史へと推展を始めていくのである。そして、水平線を越え、海へ、大洋へと乗り出すその衝動の大きさが、ヨーロッパ近代文明が世界を制覇していく決定的なモメントとなったのである。西洋近代国家が世界の海上交易路の幹線を握るにつれ、他の諸文明・諸文化の持っていた海上交易路はローカルなものへと逼塞させられてゆき、ここに近代世界システムの海洋制覇が完成するのである。それを最終的に遂行したのがかのキャプテン・ジェームス・クックであるが、クックの最後の寄港地、ハワイ諸島において、クックが、海上他界から年に一度ハワイの地を訪ねてくる豊饒神ロノと同一視されたのだというサーリンズの指摘は、近代世界システムが世界の海に散らばる島々にとつ

て神と化したことを物語って象徴的である。

以後、太平洋の長距離交易は西洋人の手中に握られ、水平線の彼方から現れた西洋交易商が、欲する島の産品を買い、代わりに島民達が欲する財（武器、酒、鉄製品など）を落としていくという一方的関係が成立する。島嶼民には自分達の産品を売りに出て行くに足る船舶も、ノウハウもなかったのである。ただ、ハワイのカメハメハ大王やタヒチのポマレ二世、ギルバート諸島の大王首長、テン・バイテケ、テン・ビノカ親子ら、西洋近代文明の衝撃の中から島嶼王国を築き上げた創業の君主達は、島嶼の特産品を王国の交易独占下に置こうとした。タヒチのポマレ二世は、白人宣教師の船を共同所有して積極的に長距離交易へ乗り出そうとしたほどである。このように、近代における太平洋島嶼王国の成立は、交易と密接な関連を持っている。その時、島嶼国家は島嶼民と外国人商人の間の、いわば陸と海、ないしは内と外との独占的な媒介者として現れる。こうした島嶼国家のもつ媒介者的特徴を塩田は第1章で詳細に考察した。このような国家形成と交易との連関は、19世紀太平洋にのみとどまるものではなく、アジアの海域国家形成においても重要なモメントであったことは、富沢論文・松島論文からも明らかにされている。

逆に、長距離海上交易という足掛かりを失うと没落する運命にあるのが、島嶼国家の弱点でもあった。世界の長距離海上交易体系に何らかの形で参画すること、これが島嶼国家に課せられた宿命的課題である。が、19世紀後半に入り、第二次産業革命が起こり帝国主義の時代になると、西洋列強が世界の海上交易の独占を始める。その時、小規模で微力な島嶼国家が存立する余地はほとんどなくなりつつあった。

帝国主義の時代が閉幕した第二次大戦後、太平洋の島嶼は次々と独立しないしは自治を獲得していったが、長距離海上交易は更に格段の進歩を遂げ、太平洋の小島嶼国家群の参画する余地は全くなくなっていた。これが棚橋論文や佐藤論文に指摘されているように、太平洋の小島嶼国家においてMIRAB経済というものが出現せざるを得ない由縁である。MIRAB経済とは、海外移民(MI)の送金(R)と先進国の援助(A)に頼って生息する官僚システム

(B) に大きく依存した経済の謂である。

たとえばトンガではトンガ人15万人のうち、じつに6万人が海外に出稼ぎに出ており、クック諸島でも出稼ぎ民の比率は本国在住民の2倍を超える。また、佐藤論文の表10に示されているように、多くの島嶼国家では海外援助がGNPの4分の1以上を占め、政府歳出においても概ね50%を上回る。今日の太平洋の島嶼国家は先進国からの生命維持装置を付けてようやく国家としての態をなしているのである。

こうした現状の中で興味深いのは、棚橋論文に描き出されたクック諸島における第6回太平洋芸術祭の光景である。この芸術祭はそれを通じて「南太平洋の伝統と文化が積極的に奨励・振興さるべきこと」とうたったフェスティバルであるが、第6回開催地として選ばれたクック諸島は「偉大なる移住」をテーマとし、参加各国にカヌー建造を要請し、それを駆ってフェスティバル会場のクック諸島に集結するという壮大な構想を立てたのである。それを通じて太平洋の小島嶼国の人々が伝統とアイデンティティに覚醒する様子はNHKテレビを通じて放映された。カヌーを造り、大海を渡る遠洋航海が人々に自立とアイデンティティの意識を目覚めさせてゆく過程を描いたその映像は確かに、太平洋の島嶼国家というものの原像を捉えていたのである。そして、そこにも海上他界の観念が現出するのである！クック諸島でフェスティバルの推進役として重要な役割を果たした一人の官吏はその理念をアヴァイキという言葉に託して語る。そのアヴァイキというのが、「遙かなる祖先の地」であり、「ポリネシア人の偉大な起源地、航海と移住が繰り返された道程と広がりそのものを指し、また死後に精霊として戻っていく場所、祖先達の住処を指す」（棚橋論文）だというのである。そして、その官吏は現代においては新たなアヴァイキが生まれ出されなければならないと言う。それは即ち、新たな島嶼国民としてのアイデンティティの生成を意味する。そしてそれを産出することができるのは唯一、海との関わりにおいてなのである。

こうして、我々は海と国家と異界との緊密な連環の場に再び立ち戻ることになる。

太平洋の島々が分断された三つのモメントを再び結び合わせることでできる日は来るのであろうか。

先進国への依存と従属から脱し、再び自立を獲ち取る日は来るのだろうか。

これが、本書の母体となった研究会の2年間を通じて、我々執筆者達に常に突きつけられていた問なのである。

本書の構成と各章の紹介

本書の対象とする所は、太平洋上に浮かぶ島嶼国家群を中心に、アジア大陸を縁どるように取りまくマレー群島、琉球列島、日本列島の島嶼部アジア地域を加えたものである。前者、すなわちオセアニアと呼ばれる海域と、後者、アジア縁辺島嶼域とは、近代以前、前者がアジア大陸に興った諸文明とは無縁に歴史をけみしてきたのに対し、後者は中国文明・インド文明・イスラム文明などアジアの諸文明からの直接・間接の影響下に自文化を形成してきたという点に大きな相違が存する。そこで、本書は大別してオセアニアの部と島嶼アジアの部に分かれることとなる。その両部を前後からはさみこむのが、近代以降の海洋史の流れを総覧した塩田による総論と、近代世界システムという観点から太平洋上のマイクロ・ステートの現状を総括した佐藤論文である。

近代以前、ユーラシア大陸を南側から包み込むように、ユーラシア大陸縁辺海域には西は北西ヨーロッパから、地中海を経てインド洋に至り、マラッカ海峡を通過して東南アジア海域部を北上し、東は中国大陸沿海から日本列島に至るまでの海上交易ルートが各文化圏ごとに成立し、それが重ね合わさるようになって、財の流動をつくり出していた。こうしたユーラシア南縁海上交易システムに対する挑戦者として登場したのがコロンブスに代表される近代ヨーロッパの海上交易者達であった。彼らは、発達した航海テクノロジーを以て、それまでの陸地に沿った沿海航路を躍り越え、または迂回し、大洋

へ乗り出すことによって、人類航海史の新たなページを開くと同時に、ヨーロッパを中心とする新たな海上交通体系を築いていった。それまで各文化圏ごとに分立していた海は、ヨーロッパ人達の手によって一枚の統合された海洋へと変貌していった。そして、ヨーロッパ人の開拓していった航路が世界の海上交易の幹線航路となり、それまでのユーラシア南縁航路は幹線に従属する支線の地位に転落していった。今や世界の海を制する者はヨーロッパ人達となったのである。

このプロセスを総合的に追跡していったのが塩田の第1章である。塩田はそのプロセスを、水平線を越えることに近代ヨーロッパが抱いた情熱をキーワードとして解いていった。そして水平線の彼方という観念には、異界への希求というものが陽に陰にまつわりついていることを見出した。その異界とは、黄金の国ジパングであったり、人類の祖アダムとイヴが放逐されたエデンの園であったり、東方にキリスト教の王国を築いた司祭王プレスター・ジョンの国であったり、南方に広大に広がる未確認南方大陸(ララ・アウストラリス・インコグニタ)であったりと様々に姿を変えながらも、ヨーロッパ人航海者達をセイレーンのように新たな海と陸地の発見へと誘ってやまなかったのである。こうした幻想に駆り立てられながら、競合するように海洋進出を進めていった結果、ヨーロッパ諸国は結果として、世界の海の覇権を握ることとなった。そして、遠距離海上交易を通しての実利も手中にすることができた。それらとあいまって、急速に進展したテクノロジーの力も与って、ヨーロッパはI・ウォーラスティンが近代世界システムと呼ぶ所のヨーロッパ中心の政治・経済の秩序の網を世界中に広げることができた。こうした秩序の網が最後に到達したのが太平洋であり、太平洋を覆うことによって、近代世界システムは地球上の海洋を全て包み込むこととなったのである。

続いて第2章において、塩田は近代西洋文明の波に押し寄せられた太平洋の島々の反作用を通観した。遙か水平線の彼方から突如として現れた白人達は、その船の奇怪なまでに大きいこと、その異貌、その所持する珍奇な物品など島嶼民達を驚倒せしむるに十分であった。彼ら白人は「パパラング=天

を突き破って来た人々」と呼ばれ、天界から来訪してきた異人だと見なされたのである。

キャプテン・クックにより太平洋の全貌が明らかになり、商船が太平洋の島々に頻繁に訪れるようになると、交易が本格的に始まり、それを通じて島嶼社会の内側も大きく変容していった。ことに白人達の持ち込んだ銃は太平洋のいたる所で激しい内戦状態をひき起こし、その中から実力と術策によって島嶼を統一する者が現れてきた。ハワイのカメハメハ大王、タヒチのポマレ二世、トンガのトゥポウ一世などがその成功例である。フィジーやサモアも島嶼王国統一への道を進んだが、ハワイやトンガやタヒチが伝統的に持っていたような社会の政治的統合度を欠いていたため、王国への足取りは不安定なものとならざるを得なかった。だが、いずれにせよ、同一文化を共有する島嶼群が一樣に王国統一を目指したことは注目すべき現象である。塩田は王国統一運動を、異人（＝西洋近代文明）出現に対する防衛反応と見なし、白人達との接触がもたらした伝統世界の裂け目を充てんする装置として島嶼王国の機制を解明していった。その結果、明らかになったことは、島嶼王国は今や異人の領域となった海と島嶼民の生活する陸の間に立って両者を媒介する媒介者であったという事実である。異人と島民、海と陸の媒介者として機能している限りにおいて、島嶼王国は、その存立の基盤を確保しえたのである。だがやがて、白人＝異人サイドが島嶼内の陸地に侵入を開始した時、海と陸の媒介者としての王国の土台はくずれ、島嶼王国は短命のうちに崩壊していくことになる。白人到来から島嶼王国成立を経て、崩壊にいたる全行程を太平洋の主要な島々に見ていったのが、塩田による第2章「水平線の彼方から－西洋近代文明の太平洋進出と太平洋島嶼国家の興亡－」である。

第3章の橋本論文からは、太平洋の各島嶼（フィジー・トンガ・クック諸島）について論じた各論部に入ってゆく。

橋本は、フィジーにおける外来王観念とその変遷を通時的に追っていった。橋本によれば、フィジーには、白人到来以前から統治者は外なる海からやってきて土地の民を征服した外来者である、という観念とその制度化が支配的

であったという。そうした土壤に白人が到来し、交易が始まり、銃器が導入され、群雄割拠していた首長国間に大戦争が勃発した。その結果、ヴィティ・レヴ島西部に君臨するムバウの大首長ザコムバウとラウ諸島を傘下に収めるトンガ人大首長マアフの二人が勝ち残る。南太平洋の一角に海洋帝国を建設するという野望を抱いたマアフは、しかしながら、フィジー人首長達の支持を得ることができず挫折する。一方のザコムバウも一度は「フィジー王」を称しながら、ついには安定した統一王国を建設することに失敗し、フィジーの主権を自らイギリスに委譲するという挙に出るのである。橋本はそこにフィジー人による「外来王の選択」を見た。こうして英国植民地となって以降は、外来性のベクトルが変化を始める。それは、内なる者が、一旦フィジーの外に出て、そこで外なるマナ（霊力）を身につけた上でフィジーに戻って、より高い次元での王として君臨するというもので、内が外を経由することによって外来性を身に付けるという構図が出現したのである。こうした新たな構図は首長ラトゥ・スクナのオクスフォード留学を以て嚆矢とするが、それ以後、「海の外のマナ」を獲得した者が行政の要職を占めるという流れが定着していく。こうした流れの中で、1970年の独立を契機として、外来人問題の焦点はかつての宗主国イギリスから、植民地時代に大量に流入してきたインド人移住者へと移行していく。フィジー人人口を越え、経済的にも優位に立つインド系住民の存在は、独立フィジーにとって常に政治的火種であった。フィジー人を中核とする同盟党はインド系政治団体を内部に取り込むことにより、自らの政治的イニシアティブを維持しようとしたが、1987年の総選挙で労働党が政権を取ると、フィジー系住民の一部はこれをインド系住民の「傀儡政権」であるとして、軍によるクーデターを起こし、政権を転覆させた。ここにもまたマアフの時同様、「外来王拒否」の心理が働いたのである。このように、外来王は土地の民に正統性を認められることによって初めて統治権を手にすることができる、という機制が常に働いているのである。独立以降のフィジーの政治的構図は、伝統的首長層の支配の正統性に海の外でマナを身に付けた平民指導者がインド系住民の支持を受けて挑戦する

というものであり、そこには、正統性と外来性の二つの契機が複雑に絡まり合いながら、首長対平民、フィジー人对インド人という対立項をめぐって政治的図柄を織りあげていく様が見られるのである。

続いて第4章大谷論文では、フィジーの東に浮かぶトンガ王国における異人と国家の結び付きが、神話時代から白人との接触を経て、トゥポウ一世によるトンガ統一にいたるまで詳細に分析されている。

トンガではフィジーとことなり、白人到来前すでにトゥイ・トンガ王家による王国統一が成されており、一時は、その勢力圏がトンガ諸島を超えて遠くサモア諸島にまで及んだことがある程であった。やがてトゥイ・トンガ王家の勢力は衰退し、トゥイ・カノクポル家が世俗的実権を握り、トゥイ・トンガは神聖王として象徴的に君臨する、二重王権制が成立した。そのトゥイ・カノクポルという称号はサモアのウポル島に淵源するものであり、その始祖ンガタの母はウポル島の出身であることから、トゥイ・カノクポル家の外来性＝異人性がうかがえる。また、トゥイ・カノクポル家に実権を奪われたトゥイ・トンガ王家もその始祖に関する伝承においては、天界の神が降臨し、地上の女と交わってできた男子であるとされ、ここにもまた、王権の持つ外来性＝異人性がかいま見られる。大谷によれば「歴代のトゥイ・トンガは、神話的な世界の歴史表象においては、明らかに共同体の外部に立つ半神半人であった」という。神聖王トゥイ・トンガは「土着の民の神として据えられ、馴化される」ことによって、トンガ社会の中に内部化されていくが、それでもなお、一般にはタブーである近親相姦をあえて行うことに代表される様々な行為によって共同体の規範を超越し続けたのである。

こうした象徴的な外来性＝異人性を帯びた王がトンガ社会に内部化されることによって、トンガ諸島は王国というまとまりを得ることになったが、その後にはフィジー・サモアなど、王国の領土の外からトンガへやってきた外来者達はムリと称されるカテゴリーに一括されることになった。こうした外来者は、排除されるか、「特別なカテゴリーに属する存在として受け入れられるか」のいずれかであったが、中でも興味深いのはマタプレというカテゴリー

の中に受け入れられた場合である。マタプレはフィジーやサモアからトンガにやって来た外来者であるが、彼らは王権と結び付き、王の決定の代弁、賓客の接待、交渉といった媒介者としての役割を与えられることになった。それは、彼らが異人であるが故であり、その異人性＝外来性を以て、トンガ王国の周縁的存在として内と外を媒介する機能を獲得したのである。このように、トンガ王権が外来者をもって、王権のまわりを堅めたという点にも、王権の持つ外来性＝異人性が姿をのぞかせている。

こうしたムリのカテゴリーには、トンガ人の伝統的世界像の中に収められているフィジーやサモアなどの近隣の島嶼民があてられたが、17世紀に入って初めてトンガ人の前に姿を現した白人達は、かつて見たことも聞いたこともない新種の異人であった。白人達は巨大な船、銃、大砲など巨大な力を以てトンガ人の前に姿を現した。彼らのことをトンガ人達はパパラング(天を切り裂いて来た人)と呼び、神聖王トゥイ・トンガに対してするような平伏、腕足への接吻をもって迎え入れた。白人達はトンガ人に「日常的現実を超越する半神半人的存在」として捉えられたのである。しかもトゥイ・トンガと違って、彼らにはトンガ社会を律するタブーの拘束には服さぬ気味の悪さがあった。そこからトンガ人の白人に対する崇敬と攻撃という両義的態度が生み出された。だが18世紀に至って白人のトンガ来訪が頻繁になると、白人達は半神半人的存在から日常的な交易者へとその性格を変えていった。そうした中で、トンガ社会の内部に住み着く白人も現れてきた。すなわちビーチコーマーと宣教師である。ビーチコーマーとは主として脱走船員から成り、西洋文明を捨て、トンガ文化に服することにより、トンガ社会からの庇護を受ける者達であった。王や首長達はこれら白人を庇護する見返りに、銃やナイフといった西洋伝来の武器の扱い方の指南を求めた。時あたかも半世紀に及ぶ大内乱時代である。彼らは銃や大砲といった西洋のマナ(力)をトンガ人のものとするための媒介者の役割を担わされたのである。また、宣教師もトンガ人の持っていない西洋の物品の供給者としてトンガ社会に受け入れられた。こうした白人の受容のあり方は、「パパラングの優越性(マナ)を承認し

つつ、パパラングを自文化の統制下において利用しようとするトンガ人の思考の枠組みを示している」と大谷は指摘する。ここでも、外来王やマタプレの時同様、異人をトンガ文化の秩序の中にどう取り込むかが問題となっている。

それは、トンガにメソディスト派宣教団が本格的に進出した時、より切迫した問題となった。伝統的文化秩序を変えずに白人を取り込もうとするトンガ側に対して、メソディスト派宣教団は伝統的宗教・祭祀の放棄・改宗を迫った。このぎりぎりの対決の末に、トゥイ・カノクポル王家のタウファアハウ・トゥポウは改宗を選択し、トンガ文化の思い切った再編に乗り出すこととなった。タウファアハウはトンガ統一の戦いを進めるかたわら、宣教師達を使って成文法をつくり、トンガ王国を西洋的立憲君主国家に改める事業に着手した。タウファアハウはトンガ統一・立憲君主化のいずれにも成功を収め、自らトゥポウ一世となって近代トンガ王権を開いた。立憲君主化・キリスト教化といった外来文化の内部化を先頭に立って推し進めることにより、トゥポウ一世はパパラング（白人）のマナ（威力）を我が物にしようとしたのである。ここにも外来性と王権の結び付きは容易に見てとれる。王権にとっての最大の課題は外部をいかに制御・統制するかという点にある。トゥポウ一世はキリスト教・立憲君主制という外部を、王権の名の下にトンガ文化の内部に呑み込むことによって、白人登場後のトンガ文化の再生に成功したのである。そうすることによって、トンガは19世紀末までに全世界を覆い尽くした、西洋列強による植民地化のうねりの中で、からくも王権による自治という最低限のアイデンティティの維持を成就しえたのであった。

大谷論文がトンガ王国の過去に着目して論を進めたのに対し、第5章棚橋論文ではクック諸島（ニュージーランド自治領）の現在及び未来への展望が語られる。

南太平洋の島嶼国家の経済はMIRAB経済と呼ばれる。その意味する所は、海外移民（MI）による送金（R）と先進国からの援助（A）に依存し、島の経済規模とは不均合いに肥大化した官僚システム（B）が分配の衝に当たるといふ点にある。クック諸島はその典型的な例である。クック諸島人のうち、国

内に残っているのは1.86万人(1991年)であるのに対し、ニュージーランドに働く移民は3.78万人(1991年)と国内人口の2倍をこえるのである。

このような一種の空洞化状態の中で、一貫して島に残り、その中で着実に自らの地位を上昇させてきた一政府官吏A氏のライフ・ストーリーをたどることによって棚橋は現在のクック諸島が置かれている状況とその未来を照射しようとする。

A氏は伝統社会の文脈ではきわめて周縁的存在であった。というのも、彼の父方の祖父はノウエ島からクック諸島のラロトンガ島へ移住してきた外来者であり、しかもA氏は母と実父の間に生まれた第六番目の子供であって、家督を嗣ぐべき位置にはなかったからである。が、実父の死後、A氏の兄姉五人が養出したり、ニュージーランドに移民したりした結果、A氏は実質的に世帯のリーダー(メツア)としての役割を負うこととなった。彼は中学を卒業後、いくつかの職を転々とした後、「内政自治に向けて官僚制度が肥大化を始めた1963年」官吏として採用され「着実に昇進を重ねていった」。そしてついには「白人専門官が務めてきた主任官吏」の位置に就き、大いに威信を高めた。だが、外来者の家系に属するA氏は近代官僚制度の内部では要職に就けたとしても、伝統的な格付けの体系内ではきわめて劣位の周縁的存在でしかなかった。しかし、ランガチラという称号を有する母方のおじの二人の息子がニュージーランドに移住後、A氏はおじをよく助け、おじのランガチラとしての役割遂行に大きな貢献を重ねていった。おじは高齢となり、称号継承に関する親族会議を開いて、A氏を後継者として指名した。継承規則に反するこの指名には異議も噴出したが結局、A氏が継承するという合意に達した。こうした合意取り付けの背景には、A氏が政府官吏として参画・指揮した一大プロジェクトがあった。

南太平洋の島嶼国家や豪・ニュージーランド・フランスなどでつくる南太平洋委員会は4年ごとに太平洋芸術祭を催しているが、第六回目の主催地となったのがクック諸島であった。このフェスティバルのために新たに文化開発省が新設され、「偉大なる移民」をメイン・テーマにしての様々な催しが企

画された。その中には参加各国にカヌーを建設してもらい、太平洋を渡ってクックに集結させた上でフェスティバルの開幕を告げるという「ヴァカ・ページェント」なる企画があった。

伝統的地位を持たぬA氏にこのプロジェクトに参加する資格はなかったが、同僚の官吏と結んで母方のおじを立てて、カヌー造りに乗りだした。地域の称号保持者を巧みに配して準備委員会を結成し、カヌー建造に必要な資金と労働力を、官吏としての人脈・才腕によって着実に確保していった。こうしてカヌー建造を通じて、A氏は功績を上げ、地域の有力者を組織し、称号取得のためのおぜん立てをしていったのである。その結果、カヌー完成の2カ月前にA氏はおじからのランガチラ称号継承のための叙位式を受けることとなったのである。その場において、A氏はカヌー建造プロジェクトでA氏を助けた同僚の官吏を自分のトーキング・チーフに指名した。トーキング・チーフは首長に代わって首長の決定を公衆に告げる役割であり、その指名は首長のみにも与えられた特権であるにもかかわらず、首長よりランクの低いランガチラ（戦士）の称号取得者がそれを行ったのであり、明らかに貴賤の序に対する侵犯であったが、カヌー建設のプロセスで実力を認めさせたA氏のこの振る舞いに非難の声は出なかった。そして、カヌー完成を祝う儀式には、首相を初めとする政府要人と伝統的首長達、そして各国駐在公使らが「A氏の招待を受けて来臨した」ことでA氏の威信はいやが上にも高まった。

こうして順調に地位を築き上げてきたA氏の抱くクック諸島の将来像はアヴァイキという概念を通じて語られる。アヴァイキとは「ポリネシア人の偉大な起源地、航海と移住が繰り返された道程と広がりそのものを指し、また死後に精霊として戻って行く場所、祖先達の住処を指す」。しかし、近代になると、アヴァイキは「祖先が大航海の末にたどり着いたユートピア」としてラロトンガそのものと等置されるようになってくる。しかし、A氏によれば、「今のラロトンガは『暗闇のアヴァイキ』である。それは『つぼみのアヴァイキ』を経て『光のアヴァイキ』に到達しなければならない」という。そして、その「一連の過程にA氏は自分のヴァカ・プロジェクトを位置付けよう

としている」。こうして、海との再生された交わりがA氏に未来のクック諸島国家像を喚起したのである。海上他界アヴァイキは過去の世界から未来の世界へ、死の領域から生の領域へ、彼岸から比岸へ移しかえられ、クック諸島が将来到達すべきユートピアとして設定し直される。そして建設されたカヌーは、この未来のユートピアとしての「光のアヴァイキ」へ向けて出航された夢の象徴である。こうして、異界と海は南太平洋の島嶼国家が未来へ向けてその理念を描く時の推進力として働き始めたのであった。ここには太平洋の小島嶼国家が依存・従属の立場から抜け出し、自分達自身の未来を構想する手がかりがつかまっている。その意味で棚橋論文は貴重な示唆に富むものとなっている。

こうして、第一部では太平洋の島嶼国家を舞台として、海と異界(異人)と国家が分ち難く連結し、欠くことのできない三位一体を成していることが、神話時代から白人到来を経て現代に至るまでの検証を経て明らかとなった。太平洋の島嶼国家がMIRAB経済と呼ばれるような依存・従属状況を脱し、新たな生命力を得て再生する鍵が何処にあるのかもおぼろげながら見えてきた。

続く第二部ではアジア海域世界における国家と海洋に関する議論が展開される。トンガを例外として、白人到来以前には国家という政治形態を持たなかった太平洋の島嶼とは異なり、大陸アジアに近いアジア海域世界は古くからアジア諸文明の波に洗われ、その結果、国家という形態がとくに成立していた。そうした歴史的文脈の中で理解しなければアジア海域世界の国家像は描き難い。第二部の3論文ともに、そうした歴史的背景を考慮に入れながら、海域アジアの国家像に迫ろうとしたものである。

まず、第6章富沢論文は東南アジア海域世界、特にマレー諸島の海洋民の視点からマレー的国家像を見ていこうとする。

東の中国文明、西のインド、イスラム両文明の接続点であったマレー諸島は古くから東と西を結ぐ中継港の役割をもとめられ、その利を生かし、すでに7世紀から交易帝国シュリヴィジャヤが成立していたが、いつの頃からか、

船を住居とし、その暮らしの大半を海上で送る漂海民（オラン・ラウト）が現れ出していた。15世紀に成立した海洋交易中継国家マラッカ王国においては建国神話からして、王と漂海民の結び付きが強調され、マラッカ王国内では漂海民達は「マラッカ王から要請された時には無償で食糧だけをもらって、漕手を供給する」。すなわち、海上や河川の支配に基盤をおくマラッカ王国の手となり足となっていたのである。ポルトガルによるマラッカ王国攻略後、マラッカの衣鉢を継いだジョホール王国においても、その軍事力の少なくとも4分の1はこうした漂海民が担っていたとされる。海上や河川を基盤とする中継港国家と海上や河川を生活の場とする漂海民の間には、切っても切れない関係が存在したのである。マラッカやジョホールに限らず、マレー世界に成立した海洋交易国家はいずれも「漁労・交易を基盤とする人的資源に本質的に依存した構造を持ち、その要といってもよいような重要な位置を可動性を備えた漂海民や海洋民が占めていたらしい」のである。そして、漂海民達はよりよい条件で自分達を保護し、交易活動の雇用者となるべき国家を求め、マレー世界の交易国家の間を遊動していたのである。

19世紀に入り、こうした東南アジアの海洋交易国家が植民地化の波に呑み込まれるとともに、漂海民もこうした交易国家との結び付きを失っていったが、それでもなお、従来の生活様式を失わず海上生活を続けていった。

第二次大戦後、東南アジア各国が独立すると同時に、国境が厳密に引かれ、海上の遊動生活を事とする漂海民には真に生きづらい状況となった。そして独立した諸国家はこうした漂海民の定着化を図った。

それでもなお、ミンダナオ内戦の折には、ミンダナオ島の漂海民バジャウ・ラウトはフィリピンを離れ、対岸のマレーシア・サバ州へ大量に移動してきたように、漂海民には近代国家への帰属意識が低く、国境を簡単に越えて移動してしまう海の民としての性格が根強く残っている。富沢によれば、「歴史上、時の権力の盛衰を機敏に察知し、相対立する権力の間を容易に移動し、最適のパトロンを追求してきたバジャウの生存戦略が、現代国家やそれを動かしている政党政治と関わる基本姿勢に連綿と受け継がれている」の

である。一方、それを許容する国家の側にも、「中央から周縁に向かって（中略）同質的、同型的な政治関係が連鎖し、その周縁部に近いほど、政体の構成要素の可動性が顕著な」伝統的マレー型海上交易国家の面影が、一見、近代的な国家としての表面の下に透いてかいま見えるのである。

第7章、松島論文では、マラッカ王国などと同時期に、やはり国際的海洋交易の中継港となることによって国家形成を果たした琉球王国が、南太平洋のラウ諸島との対比で論じられる。

中国大陸で海洋交易に積極的だった永楽帝亡き後、海禁策に転じた明朝は、そのことによってユーラシア大陸南縁をめぐる東西の大交易路、とりわけマラッカ海峡から東の東南アジア、東アジア圏の交易の流れを麻痺させることになった。こうして滞った財の流れにはけ口を見出したのが琉球の中山王察度である。察度は1372年、明に朝貢し、冊封を受けると、中国に様々な貢品を捧げ、その代償として中国の様々な物産を下賜されることとなった。

こうして閉ざされていた中国大陸の産品は琉球を水路として外に向かって流れ出した。それらの産品は琉球を経由して、東は日本、南は東南アジアの国々へ流れていったのである。南中国の閩人商人とタイアップした琉球の交易船は遠くシャム・ジャワまでも航行し、中国の産品とひきかえに、東南アジアの様々な物産を具し帰った。琉球の交易船は日本をも訪れ、日本の刀などとひきかえに、中国の産品をもたらした。こうして、中国の産品をひきかえに集められた日本や東南アジアの物品を貢品として、再び明に貢納することによって、琉球は東シナ海、南シナ海からスルー海、ジャワ海に至る海域の中継貿易国家として再生産されていったのである。こうして明帝国の華夷秩序に連なることによって、中継貿易国家として成功した琉球王国はまた、その国内においても沖縄本島を華とし、その他の島嶼群を夷とする小型華夷秩序をつくり、南西諸島から琉球弧全域を勢力圏に置いた。そして、そこでもまた貢納関係を通じて、各島嶼間の物産の流通を図ったのである。こうした華夷秩序を支えていたのが、琉球王の存在が島々に豊饒をもたらすという信念であった。王のこの超自然的な力は聞得大君という霊力ある巫女によ

て天上界からもたらされ与えられたものであり、王は聞得大君を通して統治者としての靈力を授かるのである。そして聞得大君自身は海上他界なるニライカナイから靈力を受けるのであった。松島はこのニライカナイ信仰は貧しい島嶼民の「海の彼方にある富に対する憧れ」の結晶したものだと解釈する。ここにも、海と異界と国家の分かち難い結合が見て取れる。琉球王国はその基本構造において太平洋の島嶼国家と共通するものを持っているのである。ただ、太平洋の島嶼国家との違いは、それが白人到来前のユーラシア大陸南縁海域の基幹海上交易路の中で中継港の役割を占めることで、国際的交易の流れの中に乗り、そのことによって国家を形成していった点にあった。交易とそれを通じての文明の流入。これが琉球王国成立史が新たに提起する論点である。琉球は中国大陸の明・清帝国との間に朝貢関係を結ぶことによってアジアの一島嶼となった。しかも大帝国とは直接接することなく、海をクッションとしてその「圧倒的な影響力を緩和し」、独自の文化圏をつくり上げることに成功した。こうした文化的アイデンティティを培う基盤となったのが、海洋島嶼国家としての琉球王国なのであった。

大陸中国で成立した文明に直接支配されることなく、海をクッションとして選択的にその要素を採り入れていくことによって、文化的アイデンティティを創り上げたという点では日本も同様である。

日本史は大陸に向かって自らを開く期間と、大陸に対して自らを閉ざし、内にこもる期間の繰り返して形作られているが、大陸に向かって自らを開く時、その開口部となるのが東シナ海に面した九州北部、すなわち第8章清水論文の言う「西海」であった。

清水はことに、肥前の国に注目し、そこを根拠地に中世、東シナ海を舞台として活躍した松浦党に「海人集団」としての特色を見ている。たとえば中世松浦氏は中国人との間に通婚を繰り返したという記録も、陸によって分断される国家という枠組みを超えて、海によって異邦と連なるといふ海人集団のあり様をうかがわせるものである。

そうした肥前の国＝長崎県に焦点を当て、日本がペリ一艦隊の来航によっ

て外の世界に向かって開かれた時、そこに何が起こったかを論じたのが清水論文である。

清水は海 (Sea) と大洋 (Ocean) を区別し、日本がペリー艦隊によって開かされたのは大洋としての太平洋へ向かってであるという。それに対し、中世、松浦党が活躍した舞台である東シナ海は海 (Sea)、更に言ってしまうと内海だということになる。

開国後の日本人はこの新たに開かれた太平洋と、それまでの大陸との交流の海であった東シナ海を明瞭に区別し、太平洋に向けて進出を指向する者達が「南進論者」となり、東シナ海からアジア大陸へ向けての進出を目指す者達が「北進論者」となった。

西海=長崎出身の明治期言論人、菅沼貞風と稲垣満次郎は、彼らを育んだ伝統的な交流の海、東シナ海に背を向け、太平洋への進出を呼号する南進論者となった。しかし、菅沼貞風においては南洋はアジアの一部として捉えられ、その故を以て東洋の盟主、日本の勢力圏下に置かれるべきだという論理が展開される。その頃から、日本人にとって、明治初年には南洋の一部であった島嶼部東南アジアは、時とともに、太平洋に属する大洋州の一部ではなく、アジア州に属するという見解が支配的になってゆき、ついには大陸部東南アジアと一まとめにされて「東南アジア」なる地理上の概念が成立する。そして、第一次大戦後には、ドイツから獲得した南洋委任統治領 (今日のミクロネシア) を踏み石にし、島嶼部東南アジアへの進出の機をうかがうに至るのであった。こうして、日本の帝国意識の鋒先はアジアと太平洋の交点である島嶼部東南アジアへと向けられたのである。ここにおいて、旧来の交流の海、東シナ海は南に向かって延長され、「近代の『国家の海』である太平洋」と一つに統合されることになったのである。それは交流の海の延長であるとともに、近代の大洋である太平洋をアジア大陸縁海部に収束局限させることでもあった。ここに日本人の大洋に対する想像力の限界があった。新たに開かれた大洋である太平洋に向かってはいるつもりが、結果はなじみ深い交流の海、アジアの縁海部に吸い寄せられて終わったのである。

このことは、日本が大洋という領域について開かれることがなかったということ意味する。それが、大航海時代、未知なる大洋に乗り出して行ったヨーロッパ人との決定的な差異であった。

第9章佐藤論文は1990年代において「アジア・太平洋」なる地域概念が急浮上してきたことの意味に着目することから出発する。佐藤によれば、「太平洋の時代」という言葉は、「1970年代から80年代にかけてアメリカの対アジア貿易がヨーロッパのそれを上回ったころにあらわれ」やがて「環太平洋」や「太平洋海盆」という言葉に引き継がれていったという。だが、「環太平洋」や「太平洋海盆」なる概念は、当時の冷戦下の状況と結び付いて生まれてきたものであり、冷戦状況の集結とともにその流通力を失っていった。それに代わって出てきたのが「アジア・太平洋」という概念である。この概念の浮上は、日本・NIES・アセアン・中国などの相次ぐ経済的台頭という現実のもとに、アジア太平洋地域が「全世界のGNPの50%、世界貿易の40%をしめるまでになった」ことを背景としている。冷戦終了後、アメリカ・オーストラリアのような英語系国家、メキシコやチリのようなスペイン語系国家、それに中国・日本・韓国といった北東アジアの諸国家やアセアン諸国のような東南アジア諸国家など雑多な文化・歴史的背景をもつ国家・地域群を含む環太平洋世界に、冷戦秩序に代わる秩序の樹立を指向しつつ生まれてきた概念が「アジア・太平洋」なる概念であり、それが制度的に結晶したものがAPEC（アジア太平洋協力機構）であった。その主導理念は「この地域を『自由市場』として、合理的な経済運営のもとにおこう」というものであり、それに「適合しない要因をすべて排除しよう」というものである。その結果排除されてしまったのが他ならぬ太平洋の島嶼諸国であった。それは、「アジア・太平洋」という地域概念の制度的結晶であるAPECに、パプアニューギニアを除いて太平洋の島嶼国が一つも含まれていないということからもうかがい知ることができる。後発開発途上国という烙印を押され、市場経済に則らない「『伝統的な社会』特有の非貨幣経済の構造」を根強く残し、ただでさえ規模の小さな経済が先の見えぬ停滞状況にある太平洋の島嶼諸国には、APEC構

想に入る余地はなかったのである。

こうした、太平洋の島嶼諸国を排除してしまうAPEC構想に対比して佐藤が描くのが「島嶼性や生活様式に根ざした地域的『共生』」の論理である。それは、海を、森や土に連なるエコロジカルな圏域として捉え、その上で住民が資源を自主管理していく地域社会像である。こうした社会を佐藤はネットワーク社会と呼び、近代的国民国家像と対比させるのである。

以上のように、本書には海と国家という一つの主題から、様々な変奏が紡ぎ出されるように多種多様な観点が提示されている。それでもおそらく、海の国家に対して及ぼす有形無形の影響力は語り尽くされていないであろう。それほどまでに海とは深遠にして幽邃な世界である。我々は海のほんの上っ面をひっかいたにすぎない。海は我々にとってまだまだ圧倒的に未知の領域である。今後、海に関する人類の知見が深まるにつれ、陸と海という截然たる区分は崩れ、海と陸と大気の三者を包み込んだ循環系が代わりに姿を明らかにし始めるであろう。その時、人間の海に対する関わりも大きく変化するであろう。海・陸複合体として島嶼像が生成してくる時、洋上に浮かぶ海洋島嶼国家もそのあり方を大きく変えていることだろう。その時、陸地の狭小な太平洋の小島嶼国家が思いもよらないポテンシャルを秘めていることが明らかになるかもしれない。

我々の上梓する本書はそうした未来に対する現在と過去からの中間報告である。本書を通じて、多少なりとも海への関心が喚起され、その豊かな可能性に注目しようとする方々が現れて下されば、本書の執筆陣としてこれに勝る喜びはない。

〔参考文献〕

カイバース、ルーク（漆間汎監訳）[1993]、『シーパワー／海への挑戦』NHK出版。
司馬遼太郎 [1996]、『八人との対話』文芸春秋社。